

第Ⅳ章 まとめ

調査成果の概要 本調査区からは、確認調査を含めると縄文時代早期、古墳時代、古代、中世、近世の遺構、遺物が確認されたことになる。縄文時代早期の遺物は頁岩製剥片が1点出土したのみであるが、下郷地区で早期ローム層中に文化層の存在を確認できたのは注目すべき成果といえる。以下では、本調査区を中心となった古代の竪穴建物群について考察する。

竪穴建物群について 本調査区からは8棟の竪穴建物が検出された。最も残存状況が良好であった竪穴建物8は、床面とカマド周辺の出土土師器から7世紀中葉（松永・今塩屋2002）に位置づけられるが、床面出土須恵器坏（36）は高台の形状は8世紀後半以降（竹中2010）に位置づけられるものであり、時期差がみられる。しかし、本建物から須恵器の出土は2点しかなく、遺構の切り合いを見逃した可能性も捨てきれないため、建物の時期は床面及びカマド周辺出土土師器の年代観から7世紀中葉としておきたい。竪穴建物8以外は出土遺物が少量かつ小破片であり時期の比定が困難だが、竪穴建物14は床面出土土師器坏の形状からおおよそ9世紀前半に位置づけられよう。建物の主軸方向をみると、①竪穴建物9、②竪穴建物8（竪穴建物6）、③竪穴建物1、2、3、10、14の3グループに分類することができる。この内③の竪穴建物2、3と10、14は、主軸を同一にしつつ位置をずらして重複していることから、短期間のうちに建物の建替えが行なわれた可能性が考えられる。類似する重複関係は、近接する下郷第4遺跡（宮崎市教育委員会2009）でも確認されている。こうした主軸方向を同一とする建物群が比較的近い時期に属すると仮定すれば、建物の重複関係と出土遺物の年代観から、①→②→③という建物群の変遷を推測することができる。以上のように、本調査区では概ね7世紀中葉～9世紀前半にかけて集落が営まれており、竪穴建物8に先行する竪穴建物9については、7世紀前葉以前にさかのぼる可能性も考えられる。

カマドについて 竪穴建物8のカマドは、形態的には今塩屋Ⅱb類（今塩屋2006）に近い形態のものである。煙道部はカマド天井部及び奥壁の一部が廃棄時に破壊されていることから調査時に明確にできなかったが、土層の観察から本来は煙道を有するとみられる。竪穴建物8で確認されたカマド祭祀は、カマド本体の破壊と土師器の埋設、混入、あるいは破壊を伴うものであり、宮崎平野部の古代カマド祭祀の一事例として注目される資料といえる。

【参考文献】

- 今塩屋毅行 2006「第Ⅷ章 まとめ（古墳時代）」『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 同実行委員会
- 竹中克繁 2010「日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器・土師器碗編年－」『先史学・考古学論究Ⅴ』下巻 龍田考古学会
- 宮崎市教育委員会 2009『下北方下郷第4遺跡』宮崎市文化財調査報告書第74集